



阪神淡路大震災を通じて考えた学校給食のありがたさ

1月24日～1月30日までは、「全国学校給食週間」です。日本では明治22年に学校給食が各日に広がっていきました。戦争の影響によって中断された時期もありますが、戦後、食糧難による子どもたちの栄養状態の悪化を背景に、昭和22年の1月から学校給食は再開されました。

現在の学校給食は、栄養補給という役割だけでなく、食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けるために食育としての重要な役割を持っています。

学校では、1月16日（木）に生徒集会が開かれ、その中で給食週間を考える取組の一環として保体部による給食にまつわるクイズが数問出題されました。



その集会を見ているうちに、明日は阪神淡路大震災（平成7年1月17日発生）から30年を迎える日だということと同時に、30年前の給食の様子が思い出されました。

現在のように長崎市内の中学校で給食が完全実施されたのは、平成16年の9月でしたので、平成7年当時は、学校に給食施設がある数校の中学校だけで給食が実施されていました。

当時の私はその数少ない給食実施校に勤務しており、中学3年生の担任でした。震災後全国的に物資の流通が悪く、通常の温かい給食を実施することが難しくなり、初めて【冷食】という形で給食が提供されることになりました。乾パンやゼリー、果物、牛乳、ソーセージのような内容でした。冬場の気温が低い中その給食が長く続き、ようやく卒業まじかに通常の給食に戻ったときは、3年生がとても喜んでいてことを覚えています。当たり前前が当たり前でなくなったときに、人はそのありがたさを改めて実感するものです。

「食べること」は、からだ作りの基本であると同時に、一生続く楽しみでもあり、人と人とのつながりを深める手段にもなります。給食は、毎日温かいものが提供され、また、食材に様々な工夫がなされています。再度この給食週間では、学校で給食が始まった理由や現在まで継続している意義や、提供されるまでに関わってくださっている方々への感謝を忘れず、また、自分自身の食習慣を見直す機会としてほしいものです。



1月17日(金)の給食

ご飯・牛乳・なめこ汁

浦上そばろ・五目卵焼き

配膳された分量は気持ちよく完食を！！